

繪本通俗三國志

七編

七

12
74
28

東 京 圖 書 館

七 五 冊	七 八 號	一 六 架	12 二 六 函	小 說 類	和 書 門
-------------	-------------	--------------------------	-------------------	-------------	-------------

曾
大
通
俗
函



みちのくにのしち
繪本通俗三國志七篇卷之七

目錄 明治十年交換

ちんちん
仲達父子執政

けいしん
姜維大戦牛頭山

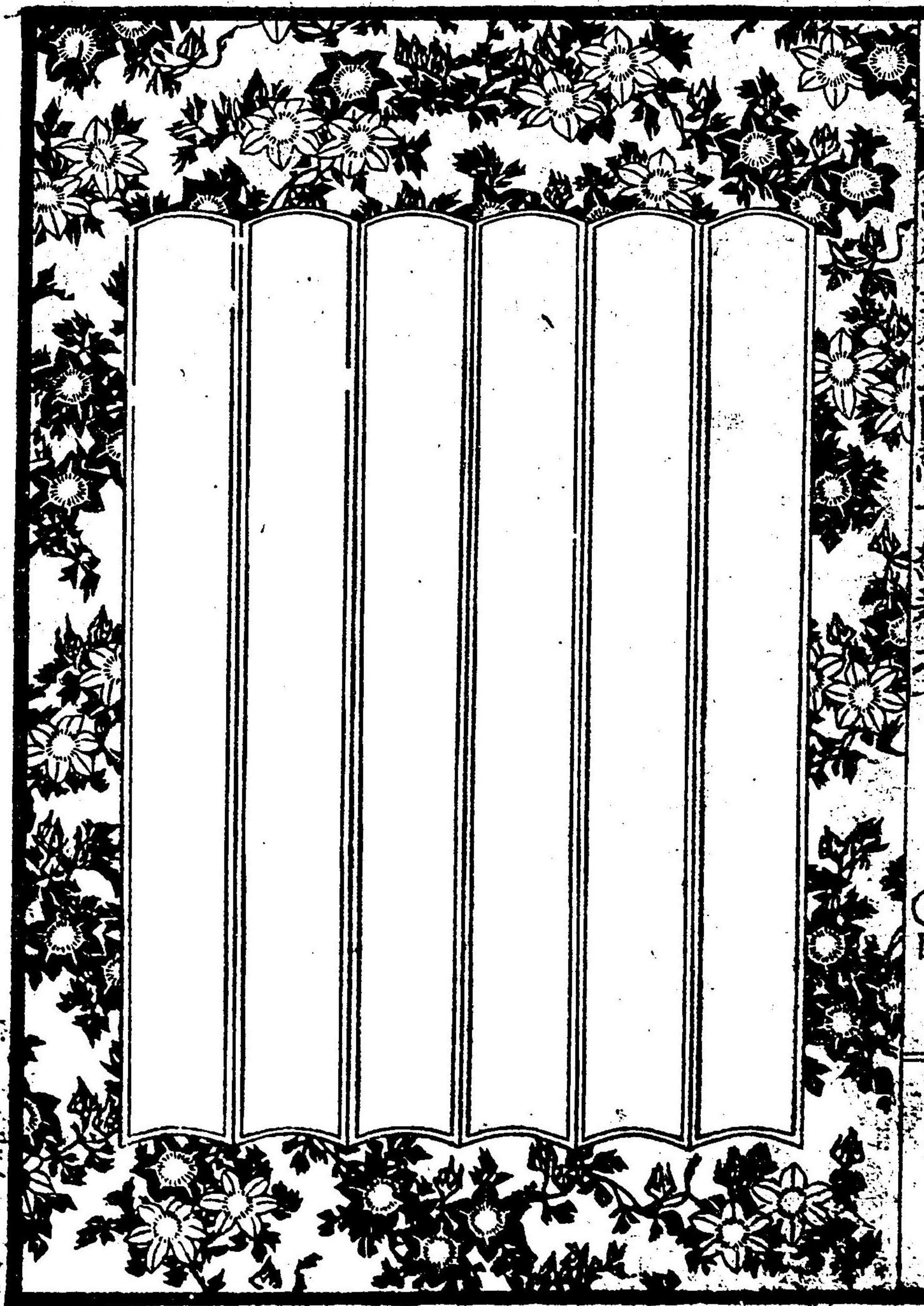
こまへい
吳魏交兵戦徐塘



繪本通俗三國志七編卷之七

仲達父子執政

曹爽とて、司馬懿が病の重きと聞て、内をあらへ、喜ば
 魏主曹芳と精じく。高平の陵に生父曹叡と祭て、後直
 り野外に出く、獵とあり、大小の百官、尽く相従ひ、曹爽も三
 人の弟と、御林の軍馬とて、何晏、鄧、賜、ホも一齊に打出
 ければ、司農、祖、範、いそぎ、曹爽が馬と扣へて、諫めて、やける。將
 軍、いそぎ、典、禁、の、兵、馬、と、統、く、何、故、も、兄、弟、尽、く、城、を、守、り、
 ま、ど、り、野、心、の、もの、あり、く、内、より、城、門、を、鎖、し、あ、ら、何
 して、回、り、つ、ぎ、曹、爽、鞭、を、あ、げ、て、叱、つ、て、曰、く、兵、権、を、我、
 ん、あり、誰、う、さ、か、う、の、企、を、お、さ、し、ん、と、て、卒、に、馬、を、早、く、尽、打、



和合

生とり司馬懿の体と同ひして大に喜び旧將と云ふま
集ぐまは軍馬とて先司徒高柔の節鉞を假て大
將軍の事と司りて曹爽が營を據し大僕王觀の中領
軍の事と行ぐ曹義が營を據し司馬懿の宮中
入る郭太后を見へ曹爽みだりの先帝太子と託するの重
と忘る奸雄として國を乱る廢せざるべ叶はず今その
兵を起しゆと云ければ郭太后大に驚いて曰く天子
の外又生る人あり卿は如何せん司馬懿が曰く臣已
に計あり御心と苦しめり之を去らば太后震ひ始れて制
するて能はざる計へと云ければ司馬懿が曰く今日
國賊を誅するとなれば天下の幸甚なりとて太尉蔣濟尚

和合

書令司馬孚二人を表して書せて黃門官を使し城外
に出で天子を奏せしめ司馬懿及び武具を貯へる
庫を行く合戦の備をあたんとし或人の由を聞て曹
爽が家へ告げし曹爽が妻の劉氏もとす心早者ある
ゆゑ自ら廳前へ走り出番の兵をちりて今主公外へ出
ゆと仲達俄に合戦の用意をあたへ何事ぞ能くまは定
よと云ければ大將潘奉との美のかりひとく精兵
板十騎を引く矢倉へ登り四方の体と望見する司馬
懿兵を引く武庫へ到らんとし潘奉とて入てさし
大に徒事みあらばとて指詰引詰さんぐ射る司馬
射たられて通下とる時孫謙といふ大將いそぎ



倉より上りて潘峯を制し。漫く矢を放ちり。今五是へ天下
の事あり。我亦その故をあらはしと云けり。潘峯を依
て射さるけり。司馬昭大勢をてせ来り。父
を守護して武庫をとり守けり。司馬懿も付く。洛河
陣を取水の上へ浮橋を造り守ける。曹爽が手下の司馬懿
芝とのいものあり。城中の変をえて。泰軍辛敞と義して
る。今仲達此のごとく乱をあら。主公出く外あり。如何せん
とあひいものぞ。辛敞が曰く。手下の勢を引く。城を
守護して。兎も角もあらん。曹芝の義も同ドけれを辛
敞も。後堂へ入る。母を見ゆ。その姐辛憲英が曰く。何ゆ
あて。緊ぐぞ。辛敞が曰く。天子外へ出り。ひく。仲達よ

兵を起して城門を閉ざれ。天下を奪のんよ。つひに辛憲
英が曰く。仲達へ天下を奪のんよ。あら。必ず曹將軍を殺
すの計あらん。辛敞が曰く。此事のまごとの実をさす。つひに
辛憲英が曰く。曹將軍へ仲達の敵手はあら。必ず殺
す。辛敞が曰く。只今曹芝のまごとの。其と共に城外
へ出ん。如何しく宜しう。辛憲英が曰く。事の
もと。他人ども互に救入。死やされ。汝が君の大事あり。
今城と出く力を扶けよ。辛敞をあら。曹芝と打つ。
叔十騎を率して。門を守る。ものと斬ち。城外へ馳せ。
り。司馬懿をたれ。とて。司馬懿相範が出ん。とて。怖れ急。
遣く招く。む。此と。相範の。子と打り。城中の

変と義さるゝ其子答て申ける。今天子外に在らば此
よての居がく。不如南門より走る。桓範が馬
又打乗平昌門より出入とすれば城門を以て閉て人を
通さず門を守る大将はもと桓範が下吏である。司蕃
といふものへければ桓範袖の内より竹版を取出され
郭太后の詔あり。早く門を開けと云ければ司蕃が曰く
我らもくくへ通して能く其の詔を以て委く見せての
ち通る。桓範怒りて申ける。汝の元來もよも從へる下吏
なり。今あまとして無礼なる司蕃是非なくして門を開きけ
れば桓範の走り出て曰く仲達は天下を奪んと汝
も我を從ひ来れ是れ汝の詔ありと詐なり。司蕃

さて山人の出入を抜きたりとして馬を飛して追蒐し及
びて空しく回る。司馬懿は之を以て大に驚き智囊
洩たり。如何せんといふ。桓範が言を用や。司馬懿は
棧豆を恋がく。必き桓範が言を用や。司馬懿は
もとして急ぎ許允陳泰二人をよびよせ。御辺城を出て曹
爽をあひ。今もよもホがらん。曹爽兄弟が兵権を削ん為
なり。別は他事ありとして彼らに安らぐ。やよといひけ
れば二人計り受て生えけり。司馬懿又校尉尹大目を呼ぶ。
蔣済が各間を渡し。御辺へもより曹爽と交深し。急ぎ
この各間を持って曹爽を曉し。我心は只兵権を削ん為
別は言ひあま由り。無事な城中に回らる。我と蔣

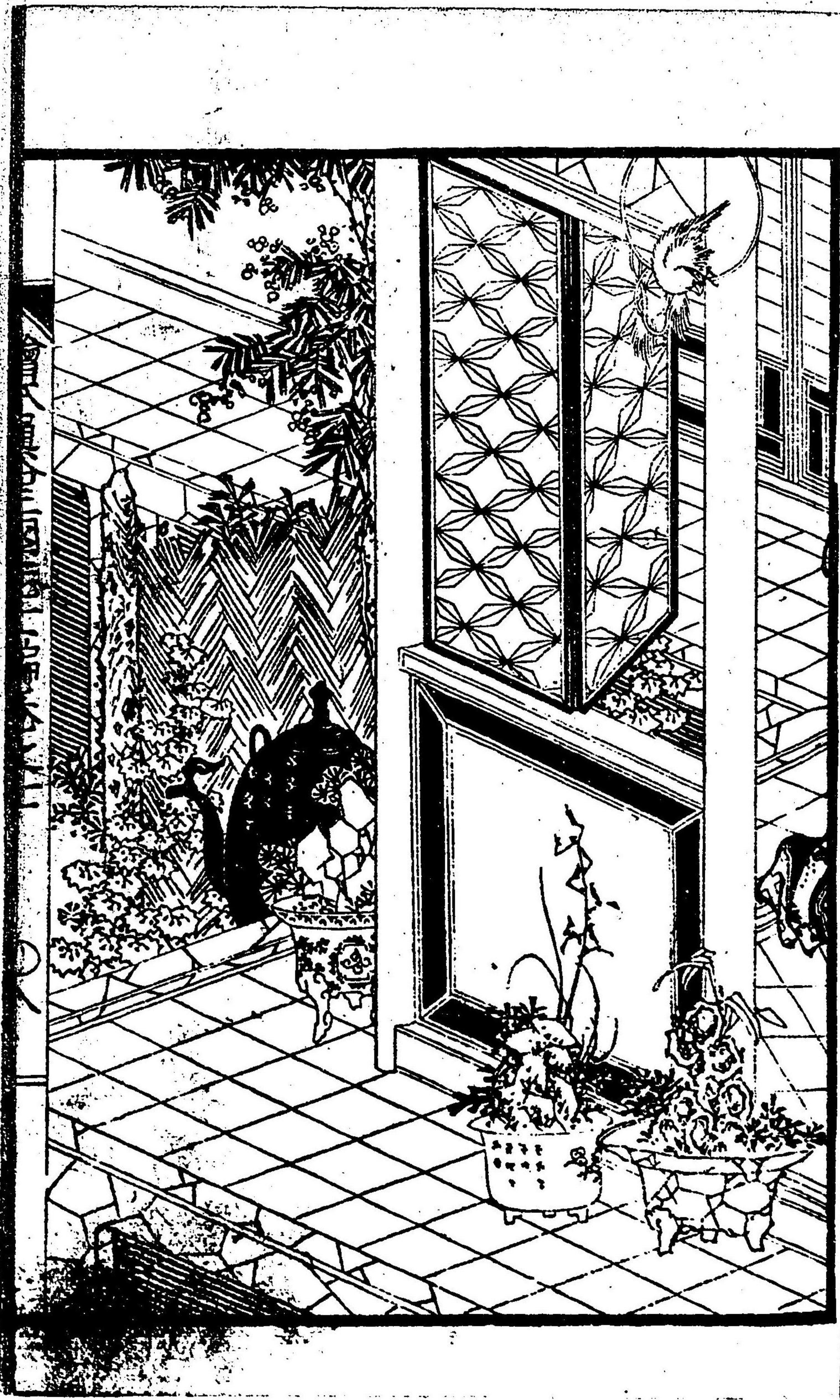
と洛水で指く。折言をあたしとて。門をひらいて生けり。のた曹爽へ野外に出く鷹を飛し。犬を走しむるを。なちまら早馬きたりの城中に變あり。太傅表を上りて。げれ曹爽大まどろひて。己の馬より落んと。黄門官のそぎ跪ひて表を上りけり。近臣のそとて。讀みその文を曰く。

征西大都督太傅臣司馬懿誠惶誠恐頓首謹表。臣昔從遼東還先帝。詔陛下與秦王及臣等升御床。把臣臂深以後事為念。臣言太祖高祖亦囑臣以後事。此自陛下所見。無所憂苦。方一有不如意。臣當死以奉明詔。黃門令董箕並才人侍疾等皆所共知。今大將軍曹爽背棄顧命。敗亂國典。內則僭擬外專威權。破壞諸營。凡

據禁兵群官要職。皆置所親。殿中宿衛。歷世旧人。皆復斥出。欲置新人。以樹私計。根據盤結。互恣日甚。外既如此。以黃門張當為都監。專共交關。看察至尊。伺候神器。離間二宮。傷言骨肉。天下洵洵。人懷危懼。且陛下但為寄生。豈得久安。此非先帝詔陛下及臣升御座之本意也。臣雖朽邁。敢亡心往言。昔趙高極意秦氏。以滅呂霍。早漸漢祚。永世此乃陛下之大鑒。臣受命之時也。太尉臣濟尚書臣孚等。皆以與為有無君之心。兄弟宜不典兵宿衛。奏永寧宮。皇太后令勅。臣表奏施行。臣輒勅主者及黃門。令嚴夾義訓。吏兵以候就第。不得逗遛。以稽車駕。敢有

魏主曹芳表を聞く。乃ち曹爽とせしめ仲達を奏せしむ。不
理の當然あり。汝ら之を裁断せんと云けし。曹爽色
と失ひ手足を張ぐ。怖と戦き。二人の弟と顧ぐ。如何せん。兄
問ふ。曹義が曰く。某とを思ぐ。已に再三諫めし。兄
迷を執て用ひのむ。今日果して其の禍を引出せり。况仲達
が流の計。天ト及ぶものちく。孔明ども勝るとはるむ。我等
兄弟いづして彼を敵せん。不如自縛して一命を助え。浩
るふ。泰軍辛敬司馬魯芝二人あへて。詔來する曹爽
城中の様を問ふ。二人答て曰く。城中の密き。鐵桶とて

と仲達大軍と引く。自ら浴水の浮橋を陣とする。只將軍
の権重。勢ひ強と削ぐ。為とあそやも。沙汰仕りの人。志
くありて。司農桓範馬と飛して來り。曹爽を見く。け
事。已に變ぜり。將軍を令天子と許昌に御幸あり。ま
らせ。懿方の勢と招き集ぐ。司馬懿と征伐し。人遅と
叶す。曹爽が曰く。我ホが妻子一族。尽く城内あり。之を
棄く。何へ行ん。桓範が曰く。將軍いとけさき。兵書と
んで。世事の真偽とまりのつたや。今まで將軍の舎を金
銀と輝し。たるも。己に他人の手より。されり。再び富貴
と求めよ。とも安んぞ。ほさ。且夫匹夫ども。質ととると。人
一人。おび。活ると。望ぬ人。とちの。將軍。天子とせし



とさるんで兵と天下を召ば雑う命と用ひざらぬものあらん然
之とて交と死と求むるの地は到りぬへんうと云けれ曹
爽を以決まるとも能はざるは涙とあぐりけり。桓範又
けるへ將軍の別營ちうく関の南あり。洛陽の典臺。凡く
治めて城外あり。若令と下し招めぬ速う来て。夜を
致さる。今この不許昌まで。路の程は約半宿までだ。死
殊に許昌の城中へ。おびく兵糧あり。軍中も憂るもの
兵糧をくりよて。今太司馬の印。其が腰あり。早
許昌の城は楯籠り。遅ましたる滅亡。及ばぬ曹爽が曰
く。汝亦あぬり。嗚もく。とあられ我よく心と静て工夫
とあさる時。侍中許允尚書令陳泰二人きたる。仲達いぬ

兵と與まへ將軍の威勢をあらんと盛ちると削らん為ち。別
他ののちう。今城中へ回く官と退きぬ。自無事
あらんと云け。曹爽黙然として言は。忽ち校尉尹太
目鞭をあげ来て。来ければ曹爽元来交深り。城の中の様
を問ふ。答て曰く。仲達浴水をさして誓をせ。他の心さる。と
ま。只將軍の兵権を削らん為ち。大尉蔣濟が昏問此
のあり。速う城中へ回りて。暫く官と退きぬ。曹爽げんも
とま。ゆる体ちりけ。桓範が曰く。事に極まり。他人の
言を聞く。自滅を求り。是夜曹爽心さる。決せむ
劍を抜く手と握り。大に嘆息して涙をろ。夜已
けれど。兄弟三人。いよいよ一決せむ。桓範又きたる。

將軍兄弟三人。一日一夜思案して、いさむんぞ決せざる。懼し
ければ曹爽、劍と地をなげて曰く、我兵と起さざる。能はず。又
世に出く官職の望もあらず。只一命と全し、富家の老翁
とさるる。一期と暮さば、心足り。桓範をよきと聞くと、嘆
き外に出くやける。父曹真のさし、大将の才ありて、鬼
怪の人ちり、いよ汝三人の兄弟、いよの真の豚積ちり。何
ぞ料らん。今日曹氏の九族を滅ぶさんとて、痛哭す
休む。許允、陳泰、志まりの曹爽を諫く。大將軍、總兵乃
印を仲達に渡し、いよとさるる。あけぬ。曹爽をよきと解んとさ
る。主簿楊紇、いよの哭くやける。將軍の武官
て休く。その印を他人に渡し、いよの必らぐ。市に引出し、斬

れ。いよ何とて桓範が言を、用ひのめ。曹爽大に怒て曰く、
仲達よも詠らど。汝もいよの唇を、開くとあるれ。とて、卒に印を
解く。渡しければ、いよまで従ひ。諸軍勢も之を、てて、
落去けり。そのち曹爽も、いよある散騎官、條と城中に回
浴水の浮橋、いよのりければ、司馬懿下知と下し、兄弟三人
て送りく。その家も回ら、いよ餘は、尽く禁獄せしむ。曹爽兄
弟、家も回ると、桓範の一人も、さく。獨歩して、ぞ入し。桓
範をよき。浮橋の辺と通ける。司馬懿馬の上より、鞭を
げ。桓太夫あ、いよ此のどくちるぞ。天子も、いよと曰の、
いよとよづりければ、桓範は、いよ慙愧し、跡を、いよ
去しけり。司馬懿と、いよ魏主と守護して、都に回し。曹爽

兄弟と一同さうるあまの鎖とめて其門戸を閉百姓
百人を命じて四方を守らせ高樓を築く家内を望
む曹爽とちひはられ心の内憂ひ悶痺するて後園
の内にて雀をとり徒然と慰め居ける。或日樓の上
る百姓ども大將軍を放しく東南へ行くと唱へけ
る。兄弟の事を羨する曹義平ける。是は百姓
どもの戯言なり。何ぞ去とゆはん。今己は糧尽て飢
あり。唇簡を送り司馬太傅の此をくりの助とて
曹爽とて従ひ一通の唇簡を封じ門を守りもの持
せ伴達を送るといひけり。乃ち太傅の府中行司馬
懿とてゆる見よその書と曰く。

賤子曹爽百拜奉書太傅尊前一切念其哀惶恐怖無
狀招禍今受屠滅前遣家人迎糧于今未返教日乏
粮万望寬私當煩見餉以繼且夕
司馬懿とてて乃ち返書と稠へ米と持せ遣しけれ曹
爽ひらきとるよその書と曰く

得書知公之之糧甚廉敢踏今致米一百石并肉脯鹽
豉大豆相送幸乞笑留

曹爽大に喜び司馬公元來我と害するの心ありといひて少
疑とありけり。司馬懿は黃門張當と捕り拷問と
我一人の志ありと何晏鄧賜李勝畢軌丁謚五人
とあひそる曹爽と計を合せ天下と篡の企するの白狀

一ければやがて五人の者どもを擄取く。糾問するは皆いさ三
月の内天子と親して國を篡の工ありと告りら司馬懿
をあらち長柄と入まて。尽く捕へ桓範詐ひて太后の詔之
と号し。推く南門を通りたる由番兵の大將司蕃きたり
て新けし司馬懿又桓範をも獄下し。惡逆の餘類と
尺く尋出さく。そのうち曹爽兄弟何晏以下のものども千
余人を市に出さく斬殺し。皆その三族を誅滅し家財を
とぐく官庫に納り集置たる女とその家は送回と爰も令
女といふものあり乃ち曹爽が従弟の文叔が妻よりく夏
侯氏の女ありをも身寡とありて子ありければ其女又
婿と扱んで嫁しやんといふも令女その耳と截く誓とま

再び嫁さるべき道ありとして。今まで曹爽が家親と居り。
曹爽を以て三族と滅ぼされて後その父魏主を新へ曹氏の
縁と断く。又他人は嫁しやんといひけむべ令女又その鼻
と切く志たぐへも一家の人たはむるもろき人の浮世のあつた
とへ輕き塵の弱き草を棲がごとく。みあよとて耳鼻と切
て自ら苦むとあさくぞ殊も汝が夫の二門のこは仲達を
ろおされたり。今誰が為此のどくあると云ければ令女
涙と押へく。しけるは我ましく仁者の盛衰をのめて節を改
むる義者存亡をのめて心で易むと曹氏を死し全盛之
し時ども我再び他人は嫁しと誓し。今その家の滅
亡とて何ぞ心を易く嫁しやんや此禽獸の行あり。

命を棄るといふ之を為す。と云けれど、司馬懿の由は、
へき世にありしが、たき負女ありとて、一人の子を令女が娘子
として、曹氏の後とて、為しつけぬ。太尉蔣濟、ひそく司
馬懿を告ぐ。魯芝、辛敞とのみの二人、日比曹爽を思顧
のゆゑ、刺門を切破りて、城を出たり。又楊綜、再三曹
爽を諫め、總兵の印と渡さまじとせり。此のゆゑ、殘置
後日の禍とあるとて、あらん。尺く殺し、人として云ければ、司
馬懿が曰く、うまおのく。其君の為は、是とある。忠義の臣
あり、何ともし君は仕へ、此のゆゑ、心のこも、持たけしと
て、赤原の官職と授けし。辛敞大に嘆息し、我若姐
の初、又またたがひ、んべ必び大義と天下は失へんとぞやける。

司馬懿とあり、榜と出し、民を安んじ、曹爽とまじり、
も罪をけられ、原のてく、用ひぬ。軍民を安んじ、業を樂み、上下と
とぐ、安堵の思ひをあり、よけ、何晏、鄧騭が非命、死
したる、果しと管輅が占ひ、應せり。その後、魏主曹芳、朝
を設け、司馬懿と丞相と封じ、九錫をかけ、二人
の子、司馬師、司馬昭も重く封爵し、あがり、父子三人、政
事を摂り、權柄肩を双る人なり。

姜維大戦牛頭山

司馬懿とて、曹爽の家を滅ぶ、のり、夏侯玄女
が雍州を守り、然もその親族あり、骨肉の義を
あめ、兵を起し、攻上る、ともあらん。然るとれ、由



き太事ちのろとちのひ生しく魏主の詔して下し。雍州一教
使を遣しく。征西將軍夏侯玄を雒陽へ上せける。夏
侯玄のちのち曹爽が外弟よ。夏侯霸が為よの姪ち。
そのとに夏侯霸も雍及びありけり。司馬懿が親族なり。こ
よび上せたることを文と大なる。我曹爽が親族なり。こ
卒よの司馬懿を殺さるべし。不如先とて手勢三千余騎
を調く。謀及を企けよ。鎮守雍及びの刺史郭淮を
聞付。時をめぐらまの推よせ。汝のれ大魏皇帝の親
族ふろく天子の恩を受あがら何や。今謀及さるとよ。
けり。けよ。夏侯霸大音あげ。曰く。我祖父國家の為
よ大功と建よの基業を関く。司馬懿匹夫罪なきよ。

曹爽を殺し。その三族と平け。却て父子三人みどりの
朝綱と手よ握る。今又使をせ。我を都よ召ん。す。
かららば篡逆の企あらん。その故に我義よよりて賊を
討汝あんで寄来さる。郭淮も力と舞して相當り。戦ひ十合あり。
けよ。夏侯霸も力と舞して相當り。戦ひ十合あり。
して。郭淮。叶がどして走けると。夏侯霸勝よのめ。追
くる不。俄に一手の勢よめと喚く。殺到も。夏侯霸もど
ろひて。さよと見れば。尚書令陳泰一軍を引く。後よさむ。
郭淮もあれをとと。取く回し。來さんで攻ければ。夏侯霸
大よ討と。さろく。逃のびとんき。横あり。さ。卒よ
漢中へ行く。蜀の後主よ降。泰と姜維とと聞く。信し。

せび人を遣して。魏の事と聞きしる。事実ありけり。夏侯覇と城中に入ると對面と夏侯覇再拜して涙を流し。事の様とめりのやと結けり。姜維が曰く。昔し微子周は仕く方代と名と傳ふ。御辺の忠と尽さむ。人の不可あらうとあらんとして酒宴と殺けく。今司馬懿父子あらうと權ととりて。魏を篡のんあり。又出て戦の用意ありやと問ふ。夏侯覇答てやける。老賊父子をドをて家業と立たり。何ぞととく出て。他國を攻るの志あらん。彼ホ父子の此のどととやせども。近ぶる。魏は名将二人あり。共とあるべし。年若し。後天將とありて。兵と用ひを蜀の爲と由り。き大事とて。ゆかん。姜維が曰く。いづる人ぞ

名とまきく。夏侯覇が曰く。一人は今秘書即たり。潁川長社の人とて。鍾會。字の士季。とあり。太傅鍾繇の子とあり。司馬懿の兵法と論どく。王佐の才ありといひ。二人は今掾吏たり。あり。義陽の人とて。鄧艾。字の士載。といひ。ものあり。司馬懿の奇才ありとて。常軍機と度る。その三人。後天將と成て。攻来らば。実と大なる患あり。姜維あぞ笑めて曰く。くるよ。その小兒あんど。道と足んやとて。伴ふて。成都に到り。後主劉禪は。奏く。やけり。司馬懿。そのついで。曹爽とあり。又夏侯覇と。やけて。殺さんと。此の人は。夏侯覇。来りて。味方と降る。今司馬懿。父子。權と專ふ。し。曹芳。降る。國とて。滅びん。と。臣。漢中とありて。年久く。兵糧を

支用満足く人強く馬壯う。願くへ勅命を受く。師と出
さん。今辛く夏侯覇降き。此を用ひて案内者く。王の師
と領して孔明の志と継再び。漢室と與さん。云けれ。簡
書令費禕やける。近比將琯董允相繼ぐ亡び。朝廷い
ぬ官と欠志づらく戦いと休て。時の至ると待り。人姜維が白く。
人の生涯世に居て。白馬の隙と過るがごとく。左様は徒然
として。月日を送らば。中原の時の。恢復せん。費禕が白
く。孫子も知彼知己百戦百勝とのり。我ホも孔明よ。お
よむ。孔明も中原と復さる。とある。何んや。我
ホとや。志く。國と保ち。民と安ん。社稷と守りて。外の望
とある。若一奉。事とある。とある。後悔とある。とある。

ぶまど。姜維が曰く。我庵上に住居して。深く羌胡のんと
志なり。今師と出して。外好と羌胡とむ。内庶民を招き
あひ。假令中國を恢復せざ。と。庵上より。西へ。心易。攻
と。さん。そのと。後主宣ひける。姜維が。一理の。汝
し。師と出さ。忠と尽して。銳氣と墜さ。と。ある。此。於て
姜維。勅を受く。朝と志の。と。漢中。出く。計を。議し。先
西羌の。胡へ。使と遣して。援の。勢を。求め。大軍。志と。ひぐ。
西平関。より。坐く。雍。及。近。付。魏。山。の下。二。の。城。を。築
て。特。角。の。勢。を。守。川。口。は。兵。糧。と。出。して。孔明。の。旧。法。を。效
ふ。と。云。け。れ。ば。夏。侯。覇。や。ける。山。谷。の。路。を。お。ひ。合。戦
よ。して。進。む。と。た。も。た。く。退。く。と。た。も。易。く。ら。び。緩。く。と。し。

兵て生るる人時、秋八月、用意二齊に備りければ、姜維ま
 づ蜀の大將、勾安、李歆二人よ、かのく一万五千余騎と、典
 山の東西に城を構へ、勾安を東と守らせ、李歆を西と守らし
 む。魏の細作の由を、やめていそぎ、雍の刺史郭淮を報し
 ければ、郭淮を、副將陳泰と相議し、雒陽へ急を告て
 援の勢を求め、先雍の勢を率し、戦將數十人を、まてが
 へ、魏山の城を攻くる。勾安、李歆を、まて、て城を、生く戦ひ
 ける。魏の勢、五万余騎、生手て、入る、揉だり、蜀の勢
 小勢、まて、戦ひ、屈し、城中、ま、り、ぞ、ひて、救を、待、魏の勢、へ、勝
 り、乘て、二、ろ、の、城を、取、廻し、兵を、分て、漢中の、路を、塞ぐ、の、
 城、俄に、構たる、と、あ、れ、ば、漢中の、通路を、止、め、ら、れて、兵、糧、虎

又と、ぢ、勾安、李歆、や、ま、ま、き、ん、ぞ、あ、り、け、郭淮、へ、兵を
 下知し、城を、攻、させ、ま、び、り、り、の、地、理、を、て、陳泰、を
 ひ、り、て、す、け、る、の、我、の、山、の、体、を、と、る、水、少、り、る、心、然、と
 なる、必、た、外、に、出、く、水、を、汲、ん、今、も、一、水、の、源、を、断、止、を、蜀
 の、勢、戦、ひ、ま、り、と、滅、ぶ、ぞ、陳泰、の、ま、げ、ま、り、と、兵、を
 分、く、山、の、尾、を、一、文、字、を、あ、り、切、水、の、源、を、止、め、け、る、ま、
 の、と、く、城、中、に、水、を、ま、り、と、諸、軍、渴、を、志、の、ふ、と、あ、る、ま、
 城、中、右、て、へ、叶、ま、り、と、大將、李歆、外、に、出、く、水、を、汲、ん、
 ま、り、と、な、り、と、魏、の、勢、を、ま、り、と、間、も、あ、り、と、取、巻、け、る、蜀、の、勢、を、
 り、討、ま、り、と、徒、に、引、回、る、勾安、も、城、中、に、水、を、あ、り、り、け、る、ま、
 散、と、合、圍、を、約、し、一、度、を、打、く、出、く、良、久、く、戦、ひ、ま、り、と、又

打負く城に入る。此より日と陸く城中に弱士卒
みお枯渴しけり。今姜都督の勢がまじ
来らば如何なる故とあり。若又二三日も延ば是城
とのよ路入らん。李歆が曰く我命をさてて田を生行の後
攻の勢を催もどし。その間いふもしく。林の人として自ら
枚十騎を引く。打ち出前なる敵と追まりて。その勢は
まぎれて走らん。とさる。魏の勢ある彼よて取まきし。と
手下の勢尽く討せし。李歆一騎奮死し。斬抜
痛手で負く。走りけり。此夜北風吹く。陰雲四方を掩
俄にみびく。雪降ければ城中のやのども。雪より
兵糧を炊ぐ。李歆へ一騎。二日。間山路をさ入て。姜維

が勢は上あは。魏山二つ名の城久く。大勢を田は漢中
の路を塞れ。兵糧通ざり。水の源をとめられて。城中は皆
渴し。苦しむ。幸ふ大雪ふり。今一兩日。林のへん
事。已に急ちり。と告げし。姜維が曰く。我はさきと救へ
んと。この内よへ急ども。羌の勢を上ると。待間。兎角延
引せり。と。李歆は漢中へ送り。瘡と治せし。夏侯
覇と。義と。やける。今西羌の勢待ども。上らば敵す
で。魏山と。田ん。事と。急ちり。御辺。い。計
ろ。の。夏侯。覇。が。曰。く。羌の。勢。を。待。ば。魏。山。の。城。を。あ。ら
び。破。し。ん。我。え。る。は。雍。州。の。勢。が。数。と。尽。し。く。魏。山。を。白
志。る。と。は。雍。州。を。あ。ら。び。空。虚。あ。ら。ん。将。軍。い。る。直。し。牛

徐唐の陣
魏の諸將
江山の聖
をみて風
影を爰
と



徐唐の陣 魏の諸將 江山の聖 卷之七 〇十九



徐唐の陣 魏の諸將 江山の聖

頭山とうざんに生なぐ。雍州ようしゅうの後のちと攻せめ。魏ぎの勢せい、鞠山きくざんとせしめてま
たり救すくへん。其そのと元げん前後ごうごより攻せべ雍州ようしゅうをあらたに破やぶる。元げん
姜維きやうい志しくえんと喜び自ら牛頭山ぎゅうとうざんとのぞんで進しん発はつを
すのとい元魏げんぎの大將たいしやう陳泰ちんたいへ李歆りしんが城じやうと出いで走はしりた。泰たい
定さだく是この定さだく救すくと求もとむる為ためあらんとく後攻ごせうの勢せいや
蒐しゅうると待まちふ。あて其その後ごもあがりしべ屹まと心付こころづく郭淮かくわい
よむのりて申まをける。今いま蜀しやくの大勢たいせい後ごよありあがり此城このじやうと救すく
へざる。元魏げんぎの勢せいと待まち揃そろん為ためあがり。若し元魏げんぎの勢せいをあらば
必かならく虚まよしのりて雍州ようしゅうを攻せめん。今いま李歆りしん田たを出いで走はしたる
救すくの勢せいと求もとむる為ためあがり。姜維きやういの城じやうの危あやまきと聞きく。あ
らば牛頭山ぎゅうとうざんに生なぐ。我われ後ごとあがりしべ。將軍しやうぐんの軍ぐんとす。

洮水たうすいを固かめ。敵てきの兵糧へいりやうとせしめて入いり。其その勢せいを分わく。
牛頭山ぎゅうとうざんと守まもり。いひひきまぶ郭淮かくわいげよも同じおなく。まぶ
る。洮水たうすいに陣ちんせし。去さちどよ姜維きやういが先陣せんちんの勢せい已やま
牛頭山ぎゅうとうざんに近付ちかづけま。忽たち然ぜんとして一手ひとての勢せい路ろとせし。金
り。魏ぎの大將たいしやう陳泰ちんたい大音たいいんあげく申まをける。汝なんぢもが雍州ようしゅうに
て。おそのんとせし。我われ入いり。相待あひまつとして。つりけ。元魏げんぎの姜
維きやういもあて。鎧よろいを拈ひひて馬まをす。ト二三合戦しんごうせんひける。
元陳泰ちんたいもあて。逃走にげそする。蜀しやくの勢せい勝かつまのりて追討おいうちに攻せけれ
ば。魏ぎの勢せいとせし。亡なびく。山の頂たかに陣ちんせし。姜維きやういの牛頭山ぎゅうとうざん
山の山下さんかに屯とんし。日夜にちや戦せんひを挑いひ。入いり。墓かぶり。牛頭山ぎゅうとうざん
負おもあがりし。夏なつ漢かん朝てうにけり。此このも。軍ぐんとす。

べけきども久しく雷がし。枚日戦く雄雄決せん。敵の計あらん不如引退ひて。別良計をさす。一時驛馬きたなり。魏の大將郭淮。洮水を固く兵糧の路を塞ぎぬと告げ。姜維大まどろひて曰く。軍中兵糧あり。安んぞ生る事を得んとして。夏侯霸を命じ。兵をさし。ぞけさせ。自ら後陣を備へ。志がくと引退く。東泰山の上より之をたたく。五手を分て追蒐ける。姜維ひとり。五路の隘口を固く。五手の敵を拒ぎ。けし。魏の勢も難所。支らざる。進得ず。東泰山を下知り。小高き山より上り。大石を飛し。兩のうらぐ。矢を放ち。ければ。姜維より。善く引退き。洮水を渡らん。とさるる。郭淮共

て造ぐ。山の陰より打く。生前後をさし。ぎりて。餘さど。攻ければ。姜維奮死し。陣を半討して。陽平関をさして走る。も。向より鼓の声。天地を動し。魏の勢漸の湧が。とく。洮水より。真先。ちる。大將の圓面。大耳。方口。厚唇。左の目の下。ま。ちる。瘤あり。瘤の上。黒毛。生たり。是とある。ち。司馬懿。が。長男。司馬師。あり。都より。五万余騎。よ。下り。ければ。蜀の勢のまり。ぞく。て。態と。まの。あ。伏居り。姜維。ま。を。て。て。孺子。い。あ。れ。べ。我。回。る。路。を。阻。る。ぞ。と。罵。り。鎗。を。拵。ひ。て。撞。く。入。る。司。馬。師。刀。を。ま。か。り。て。驛。を。交。戦。ひ。三。合。あ。ら。ざ。る。よ。叶。せ。り。と。逃。走。る。姜。維。の。あ。り。て。戦。ひ。を。さ。す。べ。陽。平。関。を。入。り。け。し。司。馬。師。又。取。り。回。り。追。さ。る。

ひて入らんときりつた。関を守る蜀の勢一度は撃つてつる
茂ちければ其矢雨よりもまじく。魏の勢もなほ射殺せん
さらし善くたのむと退ぐ。此等の孔明を傳へ。連弩にて一矢
十條の矢をもち。鏃を毒とぬる。そのち蜀山の城もあち
て大將勾安も魏に降る。姜維討たたる兵を投る。おれ萬
人はあまひけむ。漢中へ回ぐ。氣をやりおひ。虚病しくまじく
へ出だ。

吳魏交兵戦徐塘

魏の嘉平三年秋八月。司馬懿おのりも病を卧ぐ。日よそひ
危くあひければ二人の子と呼んでやける。我魏に仕る官
太傅の昇たむべし。人臣の位も望まぬ。諸人をもよ野心

ありし疑へども。我いつぞの不義の事とせん。我死し後も。
汝兄弟よく忠と尽し君の事よ必と不義の心と生じ
て。我清名と汚しおれ万一の刻と背きあへ大不孝
の子たるんまじく。とらふと。忽然と命終ぬ。司馬師。司
馬昭喪を發し。魏主を奏し。葬の礼あひけむ。魏主
曹芳とあち司馬師と大將軍を封じ。政を攝らしめ。
司馬昭と驃騎上將軍として。兄弟権を執し。父の時よ
超たり。吳の孫権へ始太子孫登徐夫人が腹に出来けらる。
赤烏四年。早世しける。次男孫和と立て。太子と定む。
その子へ瑯琊王夫人が腹に出来たる。金公主と膝し。あ
む。卒に魏に言せり。とて。廢られ。又第三の子。孫亮太子と

立まらざるの潘夫人が産所にてた。陸遜とてて死して國中の政事。ふお諸葛恪が計たり。諸葛恪は諸葛瑾の子。天和元年八月朔日。俄に大風吹く。江水涌揚り。平地水深く八尺。吳主代々の陵墓種る木の松柏尺く根より抜て。風吹く。建業城の門外よりひ来り。道の辺に倒立。けと孫権の墓よりまどろき。此より病を受け。次の年四月に至り。孫権あり。諸葛恪と大傳の封。孫盛を大司馬の封。榻前より召し跡の事ども委く。いひ置。忽然として亡ぶ。在位二十四年。壽七十一歳と。蜀の延熈十五年。ある是。於く。諸葛恪政事と擢り。孫亮と帝位を昇せ。天下を大赦と行。大英元年と改。乃ち墓と厚く祭。了て孫

権と太皇帝。益と此由傳く。維陽へきま。人けと。司馬師。魏主を奏し。吳と伐んと。尚書傳報。諫て曰く。吳は寇とあ。と。六十余年。君臣と一。吉凶。と。俱と。殊と。長江の險阻あり。先帝のと。と。勝と。と。不知と。疆と。守り。と。時の変と。窺かん。司馬師が曰く。天道の二十年。二度変と。安ん。常と。見。乃。と。双び存せん。我吳を伐んと。今と。今孫権。死。と。幼主孫亮。懦弱。ち。此時。の。伐んと。征南。將軍王。和。と。千。余。騎。と。授け。南郡と。攻。せ。征東。將軍。胡。遵。と。千。万。余。騎。と。付。く。東。吳。と。向。は。せ。鎮。南。都。督。魯。儉。と。十。万。の。勢。と。付。く。武昌。より。攻。入。り。弟。の。司。馬。昭。と。大。將。

督として。諸方の勢と下知せしむ。此年の冬十月、司馬昭とて、吳の界に到り、諸大将と集めて、守る。東吳郡の吳の第一として守る。是の堤と築く。左右二つの城とあり、巢湖の要害と拒ぐんと、心と付よ。王昶と母丘儉との各二万余騎と、別とて陣ととり。我東吳と攻破るとして、司馬昭とて、胡遵、諸葛亮の由と聞ぐ。文武の大將と集く。司馬昭とて、胡遵と浮梁と渡り、東吳の堤を攻め、王昶と母丘儉と軍武昌より、東吳の堤を攻め、司馬昭とて、胡遵と浮梁と渡り、東吳の堤を攻め、王昶と母丘儉と軍武昌より、東吳の堤を攻め、

諸將の計り、平北將軍丁奉が曰く、我國第一の東吳の勢、三方より寄るとして、彼も定む。東吳と攻んとす。今東吳の敵と追散し、勢ひの進め、自餘の敵の戦へ、退く。諸葛亮は妙論として、乃ち丁奉と、舟手の勢、三千人、投けて、江に渡り、唐咨、劉纂、の二万余騎と付く。向へ、只連珠砲と鳴ると、合圖と一齊と攻菟。我々の大軍と引く跡より、続るといひ、けれ、丁奉、令と受く。三十艘、小舟より、折節、北風烈く吹け、順風と便と、東吳と、打向魏の先陣、胡遵、諸葛亮、兼、東吳と推す。

呉の丁奉
敵將を
の戦を
奪て血
戦を

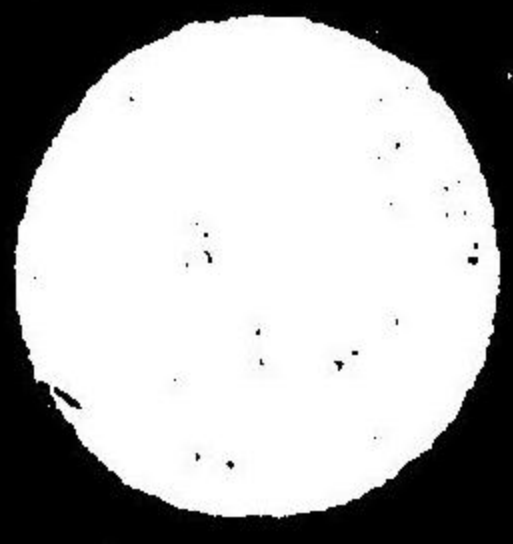
丁奉

桓景



呉の丁奉

〇三五



韓綜



韓綜

呉の丁奉

〇三五

せぐ堤の上の陣ととり相嘉韓綜といふもの二人は左
右の城と攻させけふが左の城は呉の大將全權右の城
は劉畧のいとも固く守りて元來要害よければ魏の勢
日夜攻けども未落きて城の内は寄り手目もある程
の大勢あるにのみ守りて救と待魏の本陣は徐唐
といふ名ありけるが俄に大雪降る寒気甚しくけり
を酒宴と殺けて諸大將と會し江山の風景を愛して居
たる名は介侯より告て曰く只今江の内は小舟三十余
艘をせ来りぬ胡遵を急と聞て自ら出さ望見する岸は
松く三十余艘の舟あり舟ごとく百余人のりたれば冷
笑ひて内に入り諸葛誕は向てやりける今敵の舟来るとい

ども其勢三千人よとたは是ホのものども何程の事と仕
止さんよ多くんと安くし酒を飲えと悠然として
居たりけふ呉の大將丁奉は三十艘の舟と一文字の馳連
祿大夫の士功と立名と揚してこの一戦はありは皆力を
奮く敵味方の目とさませよと云ければ三千の精兵勇
躍く甲益と脱棄く身を軽くし戦鎗の長きと用ひ
みち短き刀と提げ牙と咬で合図を待魏の勢をよと
えてとあ笑ひ啼る名も勿心然として合図の鉄砲のらね
て三芭ひまきけむべ一番丁奉舟と飛りて岸は著剣とぬ
いて躍上りむ呉の勢尽く跡はまきとがひ真地暗し魏の陣
は短兵まきとむ控し其鋒あころものおけむべ魏の勢

大勢ありつゝと人ども。情義なきさんぐもある大将韓縵の
長き戦とついで生ける丁奉身を側く敵の戦をう
るをひ走蒐く。一刀は韓縵を斬倒とも相嘉をうとてを
ま間もちく丁奉が左の方より生鎗をさすの突んと
さるで丁奉又その柄を握りまづが程ひき合けるが相嘉
鎗をさして走りけれバ丁奉まうは追うけ左の肩より腰を
うけく相嘉と二の二斬く落し奔る鎗を拵ひて猶大
勢の中へ突く入三千の呉の勢面もさらば四方八面を蒐
通り中軍の大旗を破倒し追立く操るなりと魏の勢
討るもの板をさるが我先よと逃走る先手の大将胡
諸葛も馬を飛して逃けれバ乱立ころ多勢の癖し

てのりもる浮梁を渡らんとして上が上は推合程は橋を
念ちく踏落し之弱死とるもの大半は及べり泥や馬物の
具を奔らると足の踏不へあつりけり司馬昭も東兵の先
陣破れたるとて突て安か相違しけれバ右ての叶とて
方の味方と収め都とまして上りする。

繪本通俗三國志七編卷之七終

122
74
28

